

古代ギリシアにおける 教養・教育の理念に関する研究 (6) — W. イェーガーの『パイデア』に学ぶ —

A Study on the Ideal of Culture in Ancient Greece (6): Learning from Werner Jaeger's *PAIDEIA*

畑 潤

HATA Jun

I. 本研究の課題と構成について

1. 本研究の経緯と小論の対象について

本研究は、ドイツの古代学者である W. イェーガー (1886~1961) の著書『パイデア—ギリシア的人間の人格形成—』(*PAIDEIA DIE FORMUNG DES GRIECHISCHEN MENSCHEN*) の G. ハイエットによる英訳版『パイデア—ギリシア的教養の理念—』(*Paideia: The Ideals of Greek Culture*) から学ぶことを主題とする継続研究の一環で、その継続研究(5)(都留文科大学研究紀要第84集、2016年10月)に直接連続する。具体的には、『パイデア』第Ⅲ巻(第4編)の「1 Greek Medicine as Paideia パイデア—としてのギリシアの医術」の中間部を対象とする。

2. 小論の構成について

小論Ⅱ. では、小論としての独自の節を設定して(中間部として1節から4節まで)訳出し、その節ごとに、〈注記と考察〉として私の注記的なものと簡略な考察事項とを付す。〈全体の考察〉は、この「パイデア—としての医術」の後半の訳出のあとに置くこととする。訳文の章の区切りは私の判断によるもので、その節名も私が便宜的に付したものである。

「NOTES」(「ANMERKUNGEN」)は、〈原文注記〉としてⅡ. の末尾に記す。

なお考察ノートとして、「Ⅲ. 現代日本の教育研究における古代ギリシア思想の理解」を置く。

3. テキストと論述の仕方

イ) テキストは第Ⅲ巻(1944年版)を用いる。本継続研究が複数回にわたるので、英訳版の該当ページを記入することにするが、それは1944年版のものである。なお和訳に際し、ごく一部でドイツ語版を生かした箇所がある。ドイツ語版の参照は、一卷にまとめられた復刻版(1989年、初版は1973年)を用いている。

ロ) キータームなどは、小論の趣旨に関係してくるので、適宜ドイツ語を挿入し(格変化などは原文中のまま扱った)、その訳を付すようにした。ギリシア語、ラテン語の引用文に関しては、私の素養の不足からくる誤りを避けるために、また文意は前後によって類推できるので、訳出しないでおいた箇所がある。文章中の参照事項の多くは、訳すことなくそのまま記してある。

ハ) カッコなどの表記は、これまでの継続研究の仕方に準じる。

ニ) <注記と考察>における人名等の確認に参照した文献は、本継続研究(5)と同様である。

II. 「パイデイヤーとしてのギリシアの医術」(英訳版第4編の1 Greek Medicine as Paideia)

パイデイヤーとしてのギリシアの医術(その2)

英訳版第Ⅲ巻、1944年版: 15 p~26 p

1. 古代ギリシア医術における自然哲学の影響と医術としての自立への格闘

<訳文>

われわれが、ギリシア人がもっとも初期の医学文献で‘医術(the physician's art, ärzliche Kunst)’と呼んだものに初めて出会う時代は、実に危機的(critical, kritisch)であったので、われわれが述べてきた種類の一般大衆の中に広い好奇心(wide interest, das Interesse)を呼び起こしていた。われわれは、ヒポクラテースの時代の医学者たちによって使われた一定した科学的概念から推論することによって、自然哲学が医学(medicine, das ärzliche Denken 医者の思考)を鍛えたその影響を再構成しようとし、またそれゆえそれがいかに深くその科学(the science, die ältere Medizin 古来の医学)を変容させたかを理解しようとしてきた。そのことを全面的に行ない、この科学的な医学とその原初的な前に在ったものとの間の途方もない隔たりを押し量ることは、相当の歴史的な想像力が必要とされる。それでもわれわれは、もし5世紀の高度に発達した医学が何の説明も要らないまったく当然なことがらだと思ってはならないとすれば、その努力をしなければならない(make the effort, dieser Überlegung この熟考)。われわれがそんなふうにしてしまうのは、とりわけその考え方の非常に多くのもの(so many of its ideas, ihre Grundgedanken その基本的考え)が、過去1世紀の間にわれわれはそれに細部において大いに改良を加えてきているのにもかかわらず、今日一般に通用しているので無理もないことなのである。ギリシア医術の歴史は、その文献によってわれわれに知られているように、自然哲学理論の支配に対するその格闘—その格闘は、当時はどう見ても全く閉じられていた(closed, abgeschlossen war)偉大な必然的な革命(revolution, Revolution)の兆候でしかなかったのであるが—から始まる。それ以来医術は、自然の全過程の、したがって人間の身体的生存の、正常な状態にあっても損なわれた状態にあっても、その基礎となっている力(forces, Kräfte)の効力に対する、有機体の反応を支配している法則の知識を根拠にした。一旦この確かな出発点が確立されてしまうと、多くの方向を目指してそこから離れることは容易なことだったのであり、ギリシア人の精神は、その生来の目的意識性と

鋭さと論理性をもって、その意のままになる経験が許す限り、知のあらゆる方向の開拓をしようとしたのである。偉大な自然哲学の概念が医術に取り入れられたとき、それと共にその宇宙論的な思想が入り込み人の心を不安にしたであろうということは、まったく当然のことであった。⁽¹⁾

われわれは、もっと後のエンペドクレス⁽²⁾のような自然哲学者たちが、境界壁を取り壊し医術思想を自分たちの目的に適合させる仕方を学んだということ、すでに述べてきた。これは、エンペドクレスの経験的自然哲学と宗教的予言者性との結合、とまったく同じ種類の統合である。彼の開業医としての成功は、彼の医術学説の威信を増大させたに違いない。彼の四元素 (the four elements, der vier Elemente) の哲学 (philosophical, physikalische 自然の) 理論は、熱、冷、乾、湿、⁽³⁾ という四基本性質 (the four basic qualities, den vier Grundqualitäten) の学説として、何世紀も医学の中に生き続けた。それは、非常に奇妙に、身体の基礎的な ‘humours (体液)’ という (当時: damals) 支配的な医術理論と融合するか、さもなければ、そのあらゆる敵対者を押し退け医術理論の唯一の基礎となった。この例は、哲学思想 (philosophical ideas, die physikalischen Anschauung der Philosophie 哲学の自然観) がどのように医術へと入り込んだか、またそれに対する医術の反応がいかにさまざまであったかを十分に示しているのであって、つまり、ある科学者たちがどのようにそれらすべてを疑問なく受け入れ、さっそく熱、冷、乾、湿のことばで考え始めたか、また他の者たちが、中には (まだ: noch) 医者にとって役立たない、あるいは単に瑣末な興味しかないとしてそれを退けた者たちもいたのであるが、どのように両者の妥協が成立するように既に在る体液の理論に基づいてこの性質理論 (theory of qualities, Qualitätenlehre) を把握しようと努力したか、を十分に示しているのである。⁽⁴⁾ これは、医師 (the profession, der Ärzte) の精神的機敏さと、彼らの、自然の知識におけるあらゆる新しい進歩への注意深さについて、明るい光をなげかける。あの時代の医者たちが不十分にしか試されていない理論を医学現象の説明に適用した、そのような性急さは、ギリシア人の精神に特有の部分的な欠点でしかなかった。それは主要には、彼らの経験の不十分さに帰すべきことであった。生理学や病理学においては、理論的な論究 (reasoning, Denken 思考) はまだほんの初期の段階にあった。それゆえに、その過度の大胆さや図式化に驚くべき理由がなかったわけではないが、むしろギリシア人医師の、その彼の第一目的は病人たちを治すことであり、その眼はいつもその目標に注がれている、そのようなギリシア人医師の、非実用的な思索を警戒し真の知識の進歩のために道を開いておく、迅速さ (the speed, die Schnelligkeit) と自信 (sureness, Sicherheit) に、むしろ驚くべきである。

今や、その注意深い経験的方法 (empiricism, Empirie) と個別的事例の要件の詳細な観察への回帰によって、医術は、あらゆる自然哲学 (その助けによってそれは科学へと高まったのであるが) からは独立した一つの技術として決定的に区別され、そしてついに真のそれ自身になったのである。論文 *On ancient medicine* (「古来の医術について」; Über die ältere Medizin; ΠΕΡΙ ΑΡΧΑΙΑΣ ΙΑΤΡΙΚΗΣ)⁽⁵⁾ の無名の著者は、最大の自信をもってこの主張をしている。そのとき、もちろん、彼の主張というものは彼だけのものではなかったものであり、彼は、われわれが正当にも学派と呼んでよいものの代弁者であった。学派というのはヒポクラテース学派のことであり、ヒポクラテース自身がその論文を書いた

か書かなかったかは別にしてということであるが、したがってコース学派⁽⁶⁾を、独自科学としての医術の創設者だと呼ぶことは正しい。この著者の命題は、医術は、それはどうに真の本物の技術だったのだから、新しい‘假定 (hypothesis, Grundlegung 基礎づけ)’は何も必要としない、というものである。⁽⁷⁾それゆえ彼は、真の技術 (techne, „Techne“)には、哲学者たちがその理論でするように⁽⁸⁾、一元的な原理をもち、あらゆる個々の現象をそれに還元することがぜひ必要だ、と信じている医者たちを支持することを拒否している。彼が考える、その信念は、(人びとが考えるようには) 病気の原因を確定することにおける非科学的な優柔不断から医者たちを救うことはないだろうし、ましてや、すべての患者が適切な治療を得ることを請け負うことにはならないだろう。それは単純に、治療技術がこれまで立ってきた確かな経験の立脚地を捨て、不確かな理論のほうを選ぶことを意味する。それは、哲学が手探りしつまずきもする、未知の闇の (dark, dunkel) 領域へのただ一つの取り得る道かもしれないが、⁽⁸⁾しかしそこに入るためには、医者、医学的経験が、数百年も前のその原初の始まりから、そのゆっくりとした、労苦の多い、同時に確実でもある前進を通じて獲得してきたもの、そのすべてを打ち捨てなければならない。彼は劇的な仕方で、医者、われわれに何を食べ飲むべきかを告げる (tell, verschreiben 処方する) 人間だという昔ながらの考えから出発することにより、その発展を自分の読者に深く悟らせる。長い経験 (experience, Ausprobieren 試し) をとおして、人間が、動物とは異なる食物を食べることを、そして食物をさまざまな種類に区別することを学んだのは、ほんとうに一歩一歩のことだったのである。しかし医者が、病人、人びとに対し一定の限定された食物を処方することは、また一層高い段階のことであって、つまり、健康な人間にとっての食物は、動物の食物が健康な人間に対するのと同様に、病人には危険であるだろう。⁽⁹⁾

医術を真の技術 (techne, „Techne“) へと発展させることを許したのは、あの進んだ段階のことだったのであり、というのは、その言葉を、調理のような誰でも理解している技術のために使ったりする者は一人もいないであろう。しかし滋養物 (nourishment, der Ernährung 栄養摂取) の原理は健康な人にとっても病人にとっても同じであり、つまり、それぞれ *sutable* (適切な) ものを摂らなければならない。⁽¹⁰⁾しかし適切さは、単に、重い食物と軽い食物とが識別されるべきだということの意味するのではなく、分量が決まらなければならないこと、しかもそれはあらゆる異なった体質ごとに異なることも含意している。病人は、食べる量が多すぎて損なわれるのと同じように、食べる量が少なすぎて損なわれるかもしれない。本物の医者は、個々の事例にふさわしいものを見積もる (estimate, der Bemessung 量定すること) 力量によって見分けられる。⁽¹¹⁾彼は、誰に対しても適切な量を選び取る確かな判断力をもつ者である。人が一般的な基準に依って量を定めることができるといった、目方や計量 (weight or measure, zahlenmäßig oder gewichtsmäßig 数的なあるいは目方の) の尺度というものは存在しない。⁽¹²⁾それはまったく、そうした理性的な尺度の欠損を補うことができる唯一のものである、感覚 (feeling, Takt 妥当なものに対する感覚、常識) (αἴσθησις 感覚、理解) に依ってなされなければならない。⁽¹³⁾そこが、開業医がその大部分の過ちを犯している箇所であり (die wichtigste Fehlerquelle 重大な過ちの源泉)、ほんの少しの過ちを時々しか犯さない医者は実にこの職業の大家である。大部分の医者は下手な舵手たちのようなものである。天気が大丈夫で

ある限りは、彼らの未熟さは目立つことはないが、しかしひどい嵐のときには、誰にも、彼らは役立たずだということが分かる。

この著者は、すべての一般化 (generalizations, Allgemeinheiten 一般性) に反対している。彼は、何人かの‘医者たちとソフィストたち’によってなされた主張、つまり人間とは何であり、どのようにして生じたのか、どのようなものからできているのかを知ることなしには、だれも医術を理解することはできない、という主張について議論を戦わせる。理論上は、これらの思想家たちは、もちろん完全に正しかったのであり、もし誰もが、この種の経験主義に満足していたならば、現代医化学が発見されることはけっしてなかったであろう。しかし、そのころに通用していた限りの諸要素 (elements, Elementenlehre 要素学説) の未発達な知識を考慮すると、彼の懐疑は実際問題として正しいことであった。

‘彼らの学説は、自然について書いてきたエンペドクレスや他の者たちの場合のように、哲学に陥っている。’ こう言うとき、彼はエンペドクレスその人を責めているのではなく (彼のことは意味していると思われてきたようには)、‘エンペドクレスやそういった人たちの場合のように’ と付け加えることによって、*philosophy* (哲学) (それはまだ、われわれがそれに与えているような含意を獲得していなかった^{<40>}) を定義しているのである。彼は、彼の敵対者が医術を自然哲学のより高度だと一応は思われている水準に高める努力を、誇り高い見解で対抗する、^{<41>} ‘私は、自然の正確な知識を得るには医術によるしかないと思っています。’ と。このことはわれわれの耳には奇妙に聞こえるとしても、それは彼の時代においてはまさにふさわしい。自然研究はまだ正確さという本分 (duty, die Forderung 要請) を学んでいなかった。そのことを他のあらゆる科学に先駆けて学んだ唯一の自然についての科学が、医術だったのであり、なぜなら医術においては、成功は細かな事実の正確な観察にまったく依拠しており、人間の生命がかかっているのである。そもそも人間とは何か、ではなく、‘人間は、その人の食べ物、飲み物、その人の暮らし方、そしてそれらすべてのその人への影響の仕方、との関係で、どういう存在であるのか’ — *that* (そのこと) が、われわれの著者が中心的な問題だと考えていることである。^{<42>} 彼は医者に、‘チーズはきつい (heavy, schwer)、というのはそれを食べ過ぎると体をこわすからだ。’ と言うことによって、それを解くのに十分なことをしたのだと思いつくにはいけないと警告する。彼は、それがどのように人間を損なうのか、なぜなのか、そして人体のどの部分がチーズに耐えられないのか、を知りたいと思っている。いずれにせよ、チーズは異なった人々には異なった効果をもっており、きつい食べもののきつさには異なった理由がある。そのように、医術において ‘human nature’ (der menschlichen Natur; 人間の自然性、人間本性) を一般的に (generally, schlechthin そのもの) 語るのは愚かなことである。⁽¹³⁾

<注記と考察>

(1) イェーガーはすでに、イオーニア地方の自然哲学がギリシア医学に与えた影響のことを述べている。しかしギリシア医術には、すべてのことを仮説的な一般原理で説明しようとする自然哲学の影響も現れていた。イェーガーは、そのような影響に対する医学内部における批判精神に光を当て、その医学思想がプラトーン、アリストテレスの思想 (哲学) の本質的な一部になっていったと論述している。

- (2) エンペドクレス：前495/490頃～前435/430頃。ギリシアの哲学者で神秘宗教家。彼は、「万物は地・水・火・風の4元素の混合から」と唱えたという（松原著）。本継続研究(5)の第Ⅱ章2節の〈注記と考察〉(23)を参照のこと。
- (3) hot, cold, dry, and wet の訳で（hotは「温」、coldは「寒」のように訳される場合もある）「エンペドクレス以来アリストテレスになって定式化された四つの基本性質」とされる（『ヒポクラテス全集』第1巻の「古来の医術について」の訳者の注記）。なお「古来の医術について」の著者は、その論文でエンペドクレスの名をあげて、彼の人間と自然の理解を批判している。しかしその論述の正確な主旨については、〈原文注記〉40.を参照のこと。
- (4) イェーガーは、古代ギリシアにおける医学と哲学との相互浸透と対立の複雑な歴史的事実（経緯）に注意深い考察の眼を向けている。そこに見られる、四つの基本的性質の学説と四体液論については、訳書『ヒポクラテス全集』（第3巻）に、「ヒポクラテス医学における4体液説」という充実した解説の小論がある。そこで執筆者は、「古来の医術について」のエンペドクレス批判の本質性を指摘しながら、「さきにもみたように、哲学的図式化・類型化の思考が、いかに多くのヒポクラテス医学派の人々を呪縛していたか、その強さには全く驚くほかない。しかし、こういう一見矛盾した問題点は、この考察がだんだん進むにつれて少しは解明もされよう。が、これまでの実に多くのヒポクラテス研究者も、この問題になると十分には解明してくれていないのである。」と述べている。このような解説文に接すると、イェーガーの研究はその「解明」の歴史的な意味、あるいはその探究方法というものを示しているように思われてくる。
- (5) 論文 *On ancient medicine* は岩波文庫の小川訳では「古い医術について」と訳され、和訳『ヒポクラテス全集』では「古来の医術について」と訳されており、小論では、いずれの和訳文献を参照するかによって双方を併用している。テキストの ἀρχαῖος は「昔の、古く尊い」という意味をもち、alt は「古い、昔からの」などの意味を、また ancient は「昔の、古来の」などの意味をもつ。この論文の趣旨は、たとえばその第12節で、「しかし、だからといって古い医術を、あらゆる点で正確を得ていなければそれは成立せず、またその研究の仕方が立派でないとして斥けてはならないと考えるものである。それどころかその発見は、深い無知状態のなかから推理により精密への近似点にまで達することができたという理由で、偶然のものではなく立派で正しいものとして驚嘆に値すると見なすべきである。」（訳文：岩波文庫）と述べているように、長い年月をかけて蓄積してきた医学的知見を、深い探究精神をもって正当に擁護することにある。
- なお、小川訳はローブクラシカルライブラリーが主な底本とされ、大槻によるものはリトレ版が底本とされている。この底本の違いは、忘れられてはならないものようである。
- (6) コース島とコース学派については、本継続研究(5)の第Ⅱ章2節の〈注記と考察〉(3)を参照のこと。
- (7) イェーガーがここで指摘していることは、論文「古来の医術について」の重要な主張点であり、論文の中で繰り返し論じられているが、たとえば第1節の冒頭では、「これま

で医術について論じたり書いたり試みてきた人々は、その所論のために自分勝手な仮定 (a postulate) をたてている。すなわち熱・冷・湿・乾その他をたて、このことによって、人間にとって病気や、死の原因となるものを同一の原理 (アルケー) へしぼって行き、すべてに共通の一、二を仮定している。だから彼らはその主張する多くの新規なことにおいてももちろん明らかに誤っている。しかもこれはとりたてて非難に値する。というのは、こと実地に用いられる技術に関するからである。…」と基本主題が提示され、「だからわたしは、医術は空虚な仮定を必要としないと思つた次第である。」と述べられていく (小川訳)。つまりここで「仮定」(『ヒポクラテス全集』では「前提」と訳されている) は、具体的な症例や経験に基づかない原理的次元の仮説 (「空虚な仮定 (κενής ὑποθέσις, an empty postulate)」) のことである。翻つて、この論文が評価・認識する「古来の医術」そのものについては、論文全体をとおして感銘深く論じられているのであるが、たとえば上記の(5)の引用文 (第12節) を参照のこと。そうして改めて著者は、「ところで、この方法を捨ててかの学説を唱え、技術 (医術) を仮説にもとづかせるところの人々は、どんな方式でその仮説にしたがい、人々を治療するのであろうか。わたしとしては理解に苦しむものである。」(第15節) と厳しい批判を続けて行く。(引用文中に挿入した a postulate はローブクラシカルライブラリーによる。a postulate と訳されているギリシア語の原形は ὑπόθεσις: 根本原理、前提、仮定。)

- (8) イェーガーのこのくだりは、「古い医術について」の第1節の下記のような論述のことを指していると判断される。異種の思想が出会う歴史的局面の、医者 (コース学派) の立場からの極めて意識的な主張である。

「仮定は、たとえば露出していないものやそこへ行きようのないもの、すなわち地下や天体のことがらについて何かを論じようと企てる場合に必要になるわけである。そしてそれらがどんなものを誰かが論じて判断しても、論者自身にも聞く人々にも、真偽のほどが判然とはなり得ないのである。なぜなら確実さを知るための基準になるものがないからである。」(小川訳、岩波文庫)

- (9) イェーガーの論述を理解するために、《原文注記》36. の指示も参照しながら、「古い医術について」(小川訳、岩波文庫) から下記に引いておく。

「もし仮に病気にかかっている人が、健康な人と同じ食べもの飲みものをあてがわれ同じ食生活をさせられれば効き目があり、これらと異なることをさせられれば良くないのであったとしたら、もともと医術という技術は発見されもせず、探究されもしなかったであろう。必要がなかったはずであるから。ところが、病人が健康人と同じものをあてがわれた場合、今も効目がないように昔も効目がなかったというそのやむにやまれぬ事情が、人間に医術を探究させ発見させるにいたつたのである。」(第3節)

「さて、病人に健康者の食餌をあてがうことを考えて見るならば、その有害度は健康人に野獣その他の動物の食餌をあてがう場合と変わらないことが見いだされるであろう。」(第8節)

- (10) 《原文注記》37. は、「古い医術について」の下記の箇所を示している。

「ところで、もし医術が技術ではないと考えられていても、別に不思議ではな

い。なぜなら医術については、誰しも全くの素人ではなく、誰でもがぜひとも用いなければならないためにその心得をもっているのであるから、誰もとくにその技能家と呼ばれるにはあたらないのである。とはいっても、医学の発見は大したことであり、幾多の研究と技術のたまものなのである。事実今なお、体育と訓練にたずさわる人々は、何を食べかつ飲めばもっとも消化がよく体力を増進できるかについて、同じ方法で探究しつつ始終何か新たな発見をしているのである。」

(第4節)

「…しかし先にわたしが論じたところの人々と同じ考え方で医術を探究し、これを発見した人々は、思うにまず同質の食物を量を減らして与え、はるかに少量を摂らせた。病人のうちのいくらかの者にはこれがあてはまって、明らかに効目をあらわしたが、全部にあてはまったわけではなく、少量の食物でさえ消化できぬ者もあって、この種の者には何かもっとこなれやすい食物が必要なのだと思われた。そこで粥が発明された、すなわち少量のキツイものを多量の水にまぜ、それをかきまぜながら煮沸してキツさを除いたのである。粥さえ消化できない者については、粥も廃して汁にしてしまい、その汁のまざり加減と分量が適度になるように注意を払って、必要度以上の量や濃さのものや、過少の量を与えないようにした。」(第5節の末尾)

- (11)《原文注記》38.では、「古い医術について」の第8節、第9節が指示されている。ここでは、古代の医術の認識を受け止めるために、その第9節のなかから、以下に抜粋しておきたい。ここからも、彼らの医者としての自負の念、高い倫理観が伝わってくる。

「もしわたしが説いて来たようにことがらが単純であって、キツイ食物は体に害を与え、キツくない食物は病人にとっても健康人にとっても体のためになり滋養になるのであったら、ことは容易であろう。なぜなら、大きな安全度をつかもうとする人は、キツくない食物の方に赴くべしということになるからである。ところが、もし必要量以下で過少の滋養を与える場合には、上述のことに劣らぬ過失となって人を害することになるのである。すなわち飢餓は人間の体質に強大な威力をふるって衰弱と虚弱化をもたらし、さらには死にいたらせる。欠乏からもまた飽食から来るそれとはまた異なるけれども、その苛烈さは少しも劣らぬ諸々の害が来るのである。それゆえそれらの諸害は現象以上に複雑であり、はるかに厳密な方法にまたなければならない。というのは、何かある尺度を得る努力をしなければならぬのである。しかしそれでもって正確な知識が得られるべき尺度とは、数でもなければ目方でもなく、身体感覚 (bodily feeling, ἡ τοῦ σώματος τὴν αἴσθησιν) にほかならない。それゆえ、小さな誤差しかない程度にまで正確な知識を得ることは骨の折れる仕事である。わたしは小さな過ちしかおこさないような医者があれば、強く称賛をおくりたいと思うものである。全く正確な知識などというものはめったに見当るものではないのだから。」(挿入の英語、ギリシア語は、ローブクラシカルライブラリーに拠る。)

そのあと著者は「下手な舵手」を例にしながら論じていくが、下記はその結論部である。

「…けれどもいったん重大、頑固、危険な病気にかかるならば、その時こそ医者側の過失と拙劣とが誰の目にも明らかになる。舵手にあっても医者にあっても、そのこうむる罰は悠長にかまえてはいないでたちどころにやって来るからである。」

(12) ドイツ語版では、ここに4行ほどの文章が入っている。

(13) イェーガーのこの論述は、「古来の医術について」第20節の中段の記述に対応している。《原文注記》40. に示した〈注記と考察〉(7) を参照のこと。

2. 広く症例を吟味し、一般化の方法を洞察していく

<訳文>

Epidemiai (「流行病」), *Visits* (「異国の諸都市への訪問」)⁽¹⁾ と称される7冊の本は、医術における新しい傾向の典型である、この意識的に差し控えられた (*reserved, nüchterne* 事物に即した) 経験主義的態度に対し、適切な背景を示す。それらは大部分、北部ギリシアの島嶼と本土を中心にする、長期間にわたった診療 (*practice, Praxis*) であるらしいものの症例記録で構成されている。^{<43>}異なる事例はしばしば、患者の名前と彼の町によって区別されている。この著作においてわれわれは、個々の開業医の経験がどのように、全ヒポクラテース学派が如実に物語る、医学の力強い構成へと成長したかを直接知ることができる。これらの '*memoranda*' (*ὑπομνήματα*) (覚え書き) の書式は、これらの医者たちが拠り所にして仕事をした、またわれわれがアリストテレースにおいて再び出会う、規則 (*the rule, Methodensatzes* 方法的命題) — 経験的知識 (*experience, die Empirie*) は記憶によって促進される知覚 (*sense-perception, der sinnlichen Wahrnehmung*) から生じる一の最高の図解である。

明らかに *Visits* は二人以上の観察者の著作である。それは、ヒポクラテースの *Aphorism* (「箴言」) の冒頭の、その偉大なことばの具現化である^{<44>}：「人生は短く、技術 (*the art, die Kunst*) は長い、好機はつかの間であり、試みは危険であり、そして判断はむつかしい。」⁽²⁾しかし真の学者は決して個々の部分、彼がそれらを見失うことを欲していないにしても、でとどまりはしない。真理は、個別的事例の無限の多様性に分解されることは決してない、あるいは、もし真理がそんなことであれば、それはわれわれにとって何の実際の意味をもたないということになる。⁽³⁾そうやって、あの時代の医学思想家たちは、人間本性 (*human nature, der menschlichen Natur*) の、体格、気質、病気、その他の、類型 (*types, Arten* 種類) (*εἶδη*) という概念に到達したのである。^{<45>} *Eidos* は、先ず第一に、'*form*' (*die Form*) (形、外形) を意味し、それから、諸個人から成るある群の形 (*the form*) を他の群のものから区別する、目に見える '*signs* (兆候)' (—*Merkmale* 徴表) を意味するのであるが、しかし、それはただちに、いろいろな関連する現象に共通する、識別可能などのような特徴 (*features, Züge*) にも拡張され、そのようにして (とくに複数形では) '*type*' (*Typus*) (類型) あるいは '*kind*' (*Art*) (種類) という意味をもつようになる。⁽⁴⁾その種の一般化は、「古来の医術について」の著者にさえも受け入れられている。^{<46>}彼が拒否しているのは、「熱は自然の原理であり、あらゆる健康や病気の原因である」といった、前ソクラテース流の断定である。彼によれば、人体の中には塩辛いもの、苦いもの、甘いもの、酸っぱいもの、渋いもの、味の無いもの、その他のそれぞれに異なる

る作用をもつ無数の特質のものがあり、それは混合されるならば個別に現れることはなく人を害することもないが、^{<47>}それらの一つが他のものと分離されるやいなや、それは人を害する。有機体の中でただ一つの力 (force, Kraft) が支配すること (μουναρχίη 専制) は病気の原因となり、諸力の平等 (ἰσονομίη 同等の権利) は健康をもたらす、というのは、クロトーンのアルクマイオーンの古い学説のことである。⁽⁵⁾^{<48>}しかし「古来の医術について」の著者は、四基本性質の学説も、有名な四体液の学説 (血液、粘液、黄の胆汁、黒の胆汁)、これは後になって、とくにガレーノス以来、ヒポクラテース医術の基礎だと思われたのであるが、その学説も、ともに無視している。^{<49>}その点で彼は、「人間の自然性について」を執筆し、また一時ヒポクラテースその人だと思われた、図式化する独断論者とは正に反対である。⁽⁶⁾

「古来の医術について」の著者は、*as it was then conceived* (当時思われていたような) 哲学に激しく反対しているのであるが、また彼は時には経験主義者にも鋭い打撃を与えもし、故意に怒らせようとしているように見えるのであるが、それでも彼が開拓している哲学的探究のたくさんの新しい道には驚嘆しないわけにはいかない。彼がそのことを自覚しているという印象を、彼は 'sophist' と呼ばれたいとはまったく思っていないのであるが、禁じ得ない。医学史を研究する現代の文献学者たちが、哲学的な医者ということでこの特別な著者のような経験主義的の科学者とは正反対のものを思い描くとき、ふつうは彼の例にならっている、ということは真実であり、つまり、その頭は大きな宇宙論で満たされ、その舌は、前ソクラテース的自然哲学者たちの著作から借りられた偉大で高貴なことばで満たされている人間であり—四冊の *On diet* (「食餌法について」) の著者に幾分似ているのだが、その彼の語ることは、ときにはヘーラクレイトスに、ときにはアナクサゴラス、あるいはエンペドクレスのように聞こえる。⁽⁷⁾しかし、医術が哲学思想の新しい分野を開いたのは、何人かの医者が出来合いの自然についての学説を見つけ取り入れたからではなく、そのなかのもっとも優れた才能をもつ学者たちが、真に独創的な、コロンブスのような野心的な企て (a Columbus-like voyage, bahnbrechende Art 画期的な方法) に基づいて、'nature' とは何かを発見しようと試みたことによる—つまり全自然のなかの一分野から出発したのであり、その一分野は、彼らよりも前にはだれも、これほど心の底から、これほど共感をもって、あるいはその特有の法則に対するあれほどの深い理解をもって、探究した者はいなかったのである。⁽⁸⁾

<注記と考察>

- (1) イェーガーはドイツ語版では、広く使われている、Epidemien (「流行病」) を使っているが、英訳版では *Epidemiai, Visits* と表し、自分の見解を積極的に示そうとしている。《原文注記》43. に対応する<注記と考察>(8)を参照のこと。
- (2) 「箴言」第I章1節の冒頭の一文のことであるが、下記に第1節の全文を引いておく。

「人生は短く、術のみちは長い。機会は逸し易く、試みは失敗すること多く、判断は難しい。医師は自らがその本分をつくすだけでなく、患者にも看護人にもそれぞれのなすべきことをするようにさせ、環境もととのえなければならぬ。」
(『ヒポクラテース全集 第1巻』)

- (3)この一文は、英訳版で補充されたものである。
- (4)ここで使われている types (Arten: εἶδη)、form (die Form)、signs (-Merkmale)、type (Typus) あるいは kind (Art) を、どう日本語に訳し分けるかは悩ましい。イエーガーはここでは、個別的外見の観察に始まり共通する特徴を洞察していくという過程を論述し、εἶδος の意味内容がそれに応じて変化していると指摘しているので、訳文のように表しておいた。
- (5)アルクマイオン：前500年頃に活躍。クロトーンの医師、科学者で「ピュータゴラスの弟子。自然科学に関する書物を著わし、ピュータゴラスの思想を人体に適用して、肉体は相反する諸要素の調和により健康を保ち、その調和が破れると疾病を生ずると説いた。動物解剖を通じて人体構造の研究に役立て、またギリシア人として初めて目の手術を行ない、脳は感覚器官と通じており、知覚や思考を司る中枢であるとした。ヒポクラテースと並んでギリシア医学の父と称される。」という。(松原著)
- (6)四基本性質の学説、四体液の学説とヒポクラテースについては、小論1節の〈注記と考察〉(4)を参照のこと。
- (7)「食餌法について 第一巻」の訳者は、その概説文で、「…ミクロコスモスとしての人体をマクロコスモスとしての宇宙とのアナロジーで捉えるという視点に立ち、とくに自然哲学者ヘラクレイトスの思想的影響が顕著である。…」と述べ、またその訳文注記で、エンペドクレス、アナクサゴラスの思想の影響を指摘している。(『ヒポクラテース全集 第2巻』所収)
- (8)イエーガーは、「古来の医術について」に格段の注目をし、医術が自らの領分における格闘を通して対象の認識方法を見出していったと指摘している。そしてその稜りが、ギリシア「哲学」の真の展開の素地になったと述べている。

3. 医術の経験主義的な潮流からプラトーンは自らの哲学探究の方法を洞察していく

<訳文>

われわれはすでに、プラトーンが、その確かな洞察力をもって、そのまさに始まりから医術と親密な関係をもっていた、ということを示してきた。しかしわれわれはここで、もう少し詳しくその関係を説明してもよいのであり、というのは、医術の新しい方法と考え方の説明として、そのプラトーンとアリストテレスの哲学への影響ほどよいものはないからである。それをここで検討する他の格別の理由は、それが、真にパイデアーの中心の問題であるものを提出するということである。プラトーンが彼の倫理学や政治学を確立しているとき、彼はそれを、知の数学的範型 (type, Form) でも、思弁的な自然哲学でもなく、(彼が *Gorgias* 『ゴルギアース』やその他の著作で述べているように) 医学を手本にしたということは、偶然ではなかった。『ゴルギアース』で彼は、彼がテクネーの本質と考えるものを医術を示すことによって説明し、その主要な特徴をその例から導き出す。<50>テクネー (techne) とは、人間に役立つことを目指す、それゆえそれが実行されるまでは知識としては不完全である、そのような、対象の本質 (the nature) のあの知識のことである。プラトーンによれば、医者は病気を正反対である健康の知識ゆえに認識する者であり、それゆえ、病気である者を正常な状態にもどす方策を見出すことができる者である。それが彼の、同じことを人間の魂とその健康のためにする、哲学者のひな型

(model, Bild)なのである。プラトーンの科学、つまり‘healing of the soul, Therapie der Seele (魂の療法)’と、医者科学とのこの比較は、それらが共通にもつ二つの特徴を説明し、生き生きとさせる。知の二種類は、それらの立論を自然そのものの (of nature herself, der Naturselbst) 客観的知識に基礎を置いている—つまり、医者は身体自然 (nature, Natur) への洞察を基礎にして仕事をし、哲学者は精神 (the psyche) の自然 (nature, Natur) の理解に基礎を置いて仕事をする。しかしそれぞれは、その自然の固有の分野を、単にそれを一連の諸事実として扱うことに拠ってではなく、身体、または精神 (魂) の自然構造の中に、哲学者にして教師である者と、医者との双方の行為を処方するあの指導原理 (guidingprinciple, das Normprinzip 基準原理) を見出すことを予期することに拠って、探究する。健康、と医者は身体的存在の基準 (the norm, diese Norm) を呼ぶが、プラトーンの倫理的、政治的学説 (ethical and political teaching, Rhetorik und Poritik 雄弁術と政治) が人間の魂を洞察することになるのは、健康として、ということなのである。⁽¹⁾

『ゴルギアース』⁽²⁾では、プラトーンの医術への関心は主要には、真の技術 (techne テクネー)⁽³⁾の形式と本質 (the form and essence, das Wesen und die Form) を論議することに向けられている。しかし他の重要な文章、つまり『パイドロス』で、⁽³⁾彼がそのことについて述べていることは、技術 (the art) の本質よりも医者の方法 (method, Methode) により関係している。そこでは彼は、医術は真の修辞学の手本 (the model, das Vorbild) にされるべきだと主張している—(『ゴルギアース』におけるのと同様に) 彼自身の、人間を自身にとって最高であるものに導くはずの、政治哲学の技術 (art, Kunst) を意味して。^{<51>}しかし医術の方法について本質的な問題は何だと、彼は考えるのか。私は彼の読者は、面白半分になされた彼の前の方の指摘、つまりペリクレーズ⁽⁴⁾は哲学者アナクサゴラス⁽⁵⁾から自然についての大言壮語 (bombast) (ἀδολεσχία 饒舌、弁舌) を学んできたので、あれほど説得力のある (powerful, gewaltiger 圧倒的な) 弁舌者にして精神的な指導者であったという指摘、によってしばしば道に迷ってきたと確信する。⁽⁶⁾ところで対話篇は続けて主張する、‘全体の本性 (nature, die Natur) から離れては’魂を理解することは不可能であると、そしてこの主張は、同じ原理を身体知識に適用したヒポクラテースの例によって説明される。それゆえ学者たちは通常、プラトーンはヒポクラテースを、「古来の医術について」の著者によって攻撃されている哲学者ぶる人のような、自然哲学の多少の知識をもつ医者の典型的名称として用いていた、と結論付けてきている。しかし続くヒポクラテースの方法の正確な記述はほんとうにまったく異なる結論となるのであり、そしてプラトーンのここでの意見もまた、ただただ修辞学とその魂を扱う技術 (art, Kunst) に手本を提供することを予定している。ヒポクラテースは (とソークラテースは対話篇のなかで語る)、われわれが本物の技術 (skill, Wissen und Können 知識と技量) を獲得したいと願っているその対象が、単一の本性 (nature) を持つのか、それとも複合的な (πολυειδής) 本性をもつのか、を何よりも問うべきだと、と教える。もしそれが単一のものであれば、さらに続いてわれわれは、それがどのような、他のものに作用を与え、あるいは他のものによって作用を受ける、能力 (power, Fähigkeit) をもつのかを探究すべきであり、しかるにもしそれが多くの種類 (forms, Formen 形態) (εἶδη) をもっているとすれば、われわれはそれを数えるべきであり、そうしてそれらの一つ一つを同じ

やり方で、それぞれが他のものにどのような作用を与え、あるいは他のものによってどのように作用されるかを調べることによって、研究すべきである。⁽⁷⁾

ヒポクラテース的な方法のこの叙述は、宇宙やその基本原因を定義することによって風邪 (a cold, eines Schnupfens 鼻かぜ) を扱い始めるような医者には適合しない。それは、ヒポクラテース全集 (corpus) における最高の著作すべてをとおして用いられている、真の観察者の方法 (procedure 手順, dem Verfahren やり方、方法) にはるかにふさわしい。ヒポクラテースについてのプラトーンの叙述に一致するものは、論文「古来の医術について」で、人間の本性 (the nature, der Natur) のことを幅広い一般化において話すことに対し批判されている‘哲学的医者’ではなく、それどころか、哲学的見地を批判し、人間の本性 (the natures, die Naturen) は種類が異なること、したがってチーズがその人間の胃に与える影響はそれゆえ同様に異なるに違いないということを主張する、あの論文の‘経験主義的’著者その人の方である。それゆえにその論文がヒポクラテースその人によって書かれた、と結論を下すことはおそらく軽率であり、プラトーンの叙述は、「急性病の食餌法」、それに「visits」の著者にも劣らず適合する。学者たちは繰り返し繰り返し、ヒポクラテースの方法についてのプラトーンの叙述を、ヒポクラテースの真の著作を全集の残るものから区別する試金石として使おうと試みてきた。しかし彼らは失敗してきたのであり—それは単にプラトーンにおける一節を誤解したからだけではなく、彼の叙述が大まかにすぎることにも因るのであり、その叙述はヒポクラテースの名前を、5世紀末から4世紀の科学的医術に広く一般的になっていた態度を例示しようとして使っている。おそらく、その方法を創始したのはヒポクラテースであった。しかし生き残ってきた医術文献のなかには、それを彼から学んだ他の医者たちに拠るものが多数あるように思われる。われわれが確信をもてる唯一のことは、著作「人間の自然性について」の著者(彼に、ガレーノスはプラトーンの言葉を当てた⁽⁸⁾)に特徴的な、自然哲学についての宇宙的一般化や、あるいは、論文「古来の医術について」で批判されている態度は、プラトーンがヒポクラテースの方法として叙述していること—自然の綿密な分析 (διελέσθαι τὴν φύσιν)、その種類 (types, der Arten) の列挙 (ἀριθμήσασθαι τὰ εἶδη)、そして、それぞれに対する適切な治療の定義 (προσαρμοῦνται ἕκαστον ἕκάστῳ)—とはほとんど正反対だ、ということである。

プラトーンがここで医術に固有なこととして叙述している方法 (the procedure, das Verfahren) は、実のところ彼自身が、とくに彼の後期の著作で、使っている方法であるということを確認するのに、彼の対話篇についての多くの知識を必要とはしない。医術の原本 (text, Literatur 文献) を読み、プラトーンによって叙述されている‘ソークラテース’の方法を、彼らがいかに多く前もって示しているかを発見するのは、ほんとうに驚くべきことである。われわれはすでに、どのように経験主義的な医者が、諸事実に強制され、彼らが長い研究によって定義してきた、同じ性質をもつ個々の事例を取り上げ、そして、types (Arten) あるいは forms (Formen) (εἶδη エイデー) (種類、類型) として‘それらを一緒にして見る (look on them together, zusammenzuschauen)’ (プラトーンのことばを使えば) ことを始めたか、を見てきた。医術に関わる著者たちがこれらの多数の類型 (types, Typen) のことを話しているとき、彼らはそれらを εἶδη (エイデー) と呼んだのであるが、しかし彼らのもっぱら複雑な現象の下に横たわる単一性 (the unity, die Einheit

一致)を明らかにしたいときは、彼らは‘one Idea’あるいは‘one Form’ („einen Idee“) という概念—つまり同一の様相あるいは外見 (one aspect or appearance, des einheitlichen Aspekts oder Anblicks 統一的な側面ないし様態) (μία ιδέα) という概念を使っている。eidos (Eidos) と idea (Idea) の表現とプラトーンが使っている (医療文献とは関係なしの) それらの用法の研究は、同じ結論となった。^{<52>}これらの概念は、医者たちが身体とその機能 (its functions, seinen Formen und Affektionen その様相と疾患) を研究するときに初めて使われたのであるが、プラトーンによって彼が探究しつつあった特別な主題—倫理の分野—へと、そしてそこから彼の全存在論 (entire ontology, ganze Lehre vom Sein) へと移された。彼以前には医学は、病気の種々の性質と相違 (the manifold nature and diversity, die „Vielgestaltigkeit“ und „Vielspaltenheit“ : 形態の多様性と多くに分割されること) (πολυτροπία, πολυσχιδία) は重要な問題だと認めてきており、まさにそれぞれの病気の種類の正確な数を確定しようと努力してきていた^{<53>}—ちょうどプラトーンが自らの弁証法的な分析 (dialectical analysis, Methode der Einteilung : 分割法)、それを彼はまた、一般的概念 (general concepts, der Allgemeinbegriffe) のそれぞれの類型 (types, Arten 種類) への分割とか分解 (division and breaking down, ein „Schneiden“ und „Spalten“ : 「切り分けること」とか「分割すること」と呼ぶのであるが、でするよう⁽⁹⁾に。^{<53a>}

<注記と考察>

- (1) イェーガーは、プラトーンが手本にした医学とプラトーンの哲学そのものとは、「共通にもつ二つの特徴」があると指摘する。その一つは、双方共に、それぞれの固有の対象を「自然」(「身体の自然」「精神の自然」)と観ていることである。もう一つの特徴は、双方共に対象を、単なる「諸事実」の集合として観るのではなく、それぞれの「健康」を回復する実践的な「指導原理」を見出そうという方向において探究している、ということである。イェーガーは、このような医学 (その最高の結実が「古来の医術について」である) と哲学 (その最高の達成がプラトーンの対話篇である) との統一によって、古代ギリシア思想は原理的な展開を遂げたとみている。
- (2) ゴルギアース：前485年頃～前380年頃。ギリシアのソフィストで、「彼は弁論術の発達に大いに寄与し、アッティケー方言を散文体の文語として確立。対句対語を多用する文飾に満ちたそのきらびやかな「ゴルギアース風の文体」は、世人を魅了してやまず、史家トゥーキューディデースや弁論家アンティポーン、イソクラテース等に影響を与えた。」とされ、また「プラトーンの対話篇『ゴルギアース』において、彼がソクラテースからかなりの敬意を払われていることは、注目に値する。」という。(松原著)
- (3) τέχνη (テクネー) : 技術
- (3) バイドロス：前450年頃～前400年頃。「アテーナイの人で、プラトーンの愛人の1人。ソクラテースと交流」があるとされ (松原著)、プラトーンの対話篇『饗宴』や『パイドロス』に登場する。
- (4) ペリクレーズ：前495年頃～前429年。古代アテーナイ最大の政治家で、「音楽家でソフィストのダモーンをはじめ、哲学者エレアーのゼーノンやアナクサゴラスらから教育を受け、とりわけアナクサゴラスを通して雄弁と高邁な精神を学んだ。若く

して民主派の指導者として頭角を現わし、知友キモーンの保守的・貴族的な寡頭派と対立、前463年キモーン弾劾で名をあげ、翌462年にはエピアルテースと協力して、保守派の牙城たるアレイオスパゴス会議の実権を奪った。その翌年、エピアルテースが暗殺され、キモーンは陶片追放にあったため、彼がアテーナイ政界を主導。役人の抽籤による選出や最高官アルコン職への就任資格を第3身分たる農民層にも開放(前457年)。役人・陪審員の日当支払い、市民への観劇入場料支給など民主化の徹底に努めた。」とされる。また「軍事・外交面では、アカイメネース朝ペルシア帝国とカッリアースの和約(前449)を結び、スパルターと30年間の平和条約を締結する(前446年)など、強国との間には平和を保つ一方、デーロス同盟の支配力を強化、前454年、同盟の金庫をフェニキア艦隊の来襲を口実にデーロス島からアテーナイへ移し、離反したエウボイア(前447/446)やサモス(前441～前439)を鎮定。海軍力を発展させ、同盟諸国を属国のごとくに扱って加盟領域内の度量衡や貨幣を統一し、「アテーナイ帝国」を現出させた。」とされる。また「政敵トゥーキューディデースの陶片追放(前443)後は、死ぬまで連年、將軍(ストラテゴス)職に就き、その強大な権力から「地上のゼウス」とかオリュンピオスと呼ばれ、「名は民主的だが実は第1人者による単独支配」と言われる「ペリクレス時代」を到来させるに至った。前447年以降、パルテノン神殿の造営に着工、デーロス同盟の資金を盛んに転用しつつ、さまざまな公共建築物でアクロポリスを飾り市の壮麗化を図ったほか、学問芸術を推進・奨励し、アテーナイをギリシア古代文化の中心地とした。」という。また、ペロポンネーソス戦争における「前431年末に彼が戦没勇士の国葬に際して行なった演説は、古典古代唯一の名演説と評価されている。」という(松原著)。

なおペリクレスについては、本継続研究(4)の第Ⅱ章1節の<注記と考察>(2)を参照のこと。

- (5) アナクサゴラス：前500年頃～前428年頃。イオーニアー出身の自然哲学者で「イオーニアーの自然哲学(ミーレートス学派)を初めてアテーナイに導入し、政治家ペリクレスや悲劇詩人エウリーピデースらの師となった。万物の構成要素として、それぞれ性質の違う無数の微小な種子 *spermata* を考え、原初にはそれらの種子は混沌と混じり合っていたが、ヌース *nus* (知性・精神)の働きにより運動が生じ、各種のものが秩序づけられてこの世界をつくったと説いた。」という。また、「前467年頃、隕石を見た彼は天体を研究し図解書『自然について *Peri Phyeos*』を執筆、日蝕や月蝕の原因を説明した最初の人となった。」という。(松原著)

- (6) 『パイドロス』で、「ソクラテース」は次のように発言している(藤沢令夫訳 岩波文庫)。

「パイドロス それなら、どういう行き方をすればよいのですか。

ソクラテース おそらくは、よき友よ、かのペリクレスが、弁論術にかけて何びともおよばぬ完成の域に達したのは、少しも不思議なことではないのだ。

パイドロス なぜですか。

ソクラテース およそ技術のなかでも重要であるほどのものは、ものの本性についての、空論にちかひまでの詳細な論議と、現実遊離と言われるくらいの高遠な思索とを、とくに必要とする。そういう技術の特色をなすあの高邁な精神と、あら

ゆる面において目的をなしとげずにはおかぬ力との源泉は、何かそういったところにあるように思われるからだ。ペリクレスもまた、そのすぐれた天分に加えて、この精神、この力をわがものとしたのであった。思うにそれは、彼が、同じこの精神と力量の所有者であるアナクサゴラスに出会ったおかげであろう。すなわち、彼はこの人から高遠な思索をじゅうぶんに吹きこまれ、アナクサゴラスが論じるところ多かった知性(ヌス)と無知との本体をつきとめた上で、そこから言論の技術にあてはまるものを引出して、この技術に役立てたのだ。

パイドロス どういう意味でそうおっしゃるのですか。

ソクラテス 技術の在り方としては、医術と弁論術とは、なにか同じ事情にあるようだ。

パイドロス どのように同じなのですか。

ソクラテス どちらの場合においても、取りあつかう対象の本性を分析しなければならぬ。つまり、医術とは、身体と薬と栄養とをあたえて健康と体力をつくる仕事であり、弁論術とは、魂に言論と、法にかなった訓育とをあたえて、相手の中にこちらがのぞむような確信と徳性とを授ける仕事であるが、もし君が、こういった仕事にあたって、単に熟練や経験だけに頼らずに、一つの技術によって事を行なおうとするならば、医者の場合には身体の本性を、弁論術の場合には魂の本性を、分析しなければならないのだ。」

ちなみに筆者(畑)も、『パイドロス』を読むたびに、この部分をイェーガーの言う「道に迷ってきた」読み方をしてきた(同時に読むたびに、論理的に読み切れないという‘困惑’のような感情が残り続けた)。イェーガーによれば、この部分の理解の仕方は単なる考証学的問題なのではなく、ヒポクラテース学派の医学思想の、その本質理解に関わるという。

- (7)『パイドロス』の該当箇所(≪原文注記≫51.でも指示されている)は、上記<注記と考察>(6)の続きであり、藤沢令夫訳(岩波文庫)では次のようになっている。

「ソクラテス ところで、魂の本性を理解するのに、その全体の本性をはなれて満足に理解することができると思うかね。

パイドロス いやしくもアスクレピオス派の医学者、ヒポクラテスの言葉を多少とも信じなければならぬとすれば、身体についても、あなたが言われた方法をとらないと、その本性を理解するのは不可能だとのこと。

ソクラテス そうだとも、君、ヒポクラテスの言うことは正しい。けれどもぼくたちは、ヒポクラテスだけに頼っていないで、さらにももの道理そのものにたずね、道理の示すところがヒポクラテスの言葉と一致するかどうかを、しらべてみなければならぬ。

パイドロス 賛成です。

ソクラテス それでは、この本性の問題について、ヒポクラテスと正しい道理とがどのようなことを述べるか、しらべてみたまえ。——そもそも、どのようなものにせよ、あるものの本性について考察するには、次のようなやり方によるべきではなからうか。まず第一、ぼくたちがあるものに関して、自分でも技術を身につけ、また他人を技術家にしたるだけの能力をもちたいとのぞむなら、技術を向

けるべきその対象が、単一のものか、それとも多種類のものかをしらべること、つぎに、もしその対象が単一のものなら、そのものがもっている機能をしらべてみる。すなわち、それは本来、能動的には何に対してどのような作用をあたえ、受動的には何からどのような作用を受けとるような性質のものであるかを、しらべるのである。またもし、その対象が多種類のものならば、その種類を数え上げ、しかるのち、そのひとつひとつの種類について、単一な種類の場合にやったのと同じことを、つまり、それが本来何によってどのような作用をあたえ、あるいは何からどのような作用を受けるような性質のものかを、見なければならぬ。」

(8) 「人間の自然性について」の訳者(大槻マミ太郎)は、その概説文で、「…ガレノス(紀元二世紀)は、四体液を叙述する第一～八節の部分をヒポクラテスのすぐれた真作部分として、後世にこの体液説を広めた。」と指摘している。(『ヒポクラテス全集 第1巻』)

(9) 古代ギリシア医学のなかで立ち現れていった *eidos* (Eidos) と *idea* (Idea) をめぐる医学探究方法が、哲学に移され、プラトーン(たち)が使う哲学概念となっていく、その歴史的経緯と具体的な意味内容が述べられている。イエーガーはすでに、その概念形成の長い長い前史について第1巻で論述しているが、古代ギリシア医学における集団的探究の格闘と哲学との交渉において、人間研究は、決定的な展開の局面に入ったことになる。(なおドイツ語版では、この後に、内容的には≪原文注記≫53 a に該当する5行ほどの文章が続いている。)

ところで、医学と人間研究との関連を問う著作としては、高間直道・吉村章編著『人間像を求めて—医学と哲学を結ぶもの—』(北樹出版、1982年)があり、古代ギリシアから近現代までの思想家が取り上げられている。そのなかでは、(歴史の順序は逆転し) ガレーノスが第1章で、ヒポクラテースが第2章(執筆者は大槻真一郎)で対象とされている。

4. ギリシア医学とプラトーン、アリストテレスの哲学思想

<訳文>

医学を哲学と比較しているとき、プラトーンは主としてその規範的な性質のことを考えている。それゆえ彼は、(医者と並んで: *neben dem Arzt*) 同じ種類の知識の別の例として舵手(*the pilot, den Steuermann* 航海士)のことに言及し、そしてアリストテレスはそうすることにおいて彼に倣う。しかし彼らは二人とも、医者と舵手の対照を評論「古来の医術について」から借用したのであり、そこでそれは、この関連において初めて使われたのである。^{<53b>}しかしプラトーンが主として、舵手と医者は共に行為の規準(*the standard, der Norm* 規準・規範)を認識するようになるという事実に関心をもっているのに対し、アリストテレスはその示唆に富む比較を別の論点を証明するために使っている。彼の『倫理学』で論議されている中心的な問題の一つは、普遍的である規準(*standard, die Norm*) というものを、個人の生活や、さしあたりは一般的な規定(*general rules, generellen Regelung*) で処理されることが不可能に見える個別事例にどのように適用するかである。この問いは教育の分野では決定的に重要である。そのことでアリストテレス

は、個人の教育 (the education of the individual, Individualerziehung) と共同社会の教育 (the education of the community, Gemeinschaftserziehung) との間に根本的な区別を設け、それを医術の例によって支える。<53c>しかし彼はまた医術を、個人がいかにして自身自身の行為にとっての本物の規準 (standard, Richtschnur 指針) を見出すことができるかを示すためにも使うのであって、というは、医術は、適切な倫理的振る舞いが、健康な身体的食餌療法 (diet, Diät 摂生、食養生) のように、過多と不足との間の中庸 (the mean, einer richtigen Mitte) を保持することに存する、ということを示すのである。われわれはこの表現を、もしわれわれが、アリストテレスによれば倫理性はわれわれの欲望や嫌悪 (desire and aversion, der Lust und Unlust 欲求と嫌気) といった本能の調節に関係しているということを出すならば、一層理解できる。プラトーンは、彼よりも前に、満たすことと空にすること (filling and emptying, der Füllung und Leerung) という医術概念を、欲望の理論を論じるのに使い、欲望とは、調節を必要とする ‘より多い、あるいは、より少ない’ (‘a More or a Less’, „Mehr oder Weniger“) ということが生じる分野の一つである、と結論を下していた。<53d>アリストテレスは、規準 (the standard, das Kriterium 基準) は中庸 (the mean, die richtige Mitte) だという—しかしながら、両極端の間の厳密に固定された数学的な点ではなく、つまり計りの絶対的な中間ではなく、当の個人にとって適切な中間 (the right mean, rechte Mitte) のことである。このゆえに、倫理的行為は、過多と不足の間に、われわれにとって適切な中間を ‘めざす’ ことに存する。<53e>ついでながら、アリストテレスによって使われているすべてのことば—*excess* (過度), *deficiency* (不足), *the mean and the right proportion* (中間と適度), *aiming* (目指すこと), and *perception* (それに知覚) (αἴσθησις: 感覚、知覚) (des Übermaßes wie der des Mangels, der Mitte und des richtigen Maßes, des Zielens (στοχάζεσθαι: 狙う、目指す) und des sicheren Taktes (ἀίσθησις))—彼の絶対的な規則 (rule, Regel) が存在することの否定や、個人の本性にふさわしい規準 (a standard, Norm) が見いだされるべきであるという主張、はもちろん：こういうことのすべてが、直接的に医術から借りられており、しかも彼のその論議はまさしく論文「古来の医術について」をもとにしている。<54>

もしわれわれが、あるいは今風の間違いをして ‘originality (独創性)’ だと呼んでいるものをアリストテレスに約束するために、あの依存関係 (that dependence, diese Tatsache この事実) を手加減しようとするならば、われわれがギリシア人の思考方法 (the Greek way of thinking, der griechischen Geistesart ギリシア人の精神のあり方) について無知であることを自らに宣告するようなものとなるだろう。そのような独創性は誤った尺度であり、それをを使う者に事実を誤審させるだけである。プラトーンとアリストテレスは、自分たちの学説に対し、それが並行する思想分野で得られた結論に支えられることによって、いっそう高い権威を得る。ギリシア人の生活の組み立てにおいて、すべての部分はお互いに支え、また支えられており、石は石を支えている (stone upholds stone)。ギリシア人の思想の発展におけるこの原理、それをわれわれはすでにその成長の早期のすべての段階の作品で (at work) 見てきたのであるが、それが今や人間のアレテー (human arête, der Arete des Menschen: 人間としてすぐれていること) というプラトーンとアリストテレスの中心的な学説という決定的な論点で確認されるということを知ること

は重要である。そしてそれは、ひと目見て思われるような、単なる類似性の問題ではない。身体の適切な治療 (treatment, Therapie) という医術学説は、言ってみれば、それが魂の適切な世話と治療 (care and treatment, Pflege und Therapie) というソクラテースの学説に取り入れられるとき、より高い力へと高められるのである。⁽¹⁾(というのは:denn) プラトーンとアリストテレスの、人間のアレタイ (the aretai, die Aretai) という概念は、精神のアレタイはもちろん、身体のアレタイも同様に含んでいるのである。◀55▶このように、医術は完全にプラトーンの哲学的人間学 (philosophical anthropology, philosophische Anthropologie)、つまり彼の人間科学 (his science of Man) に同化される。この見地から、医術という専門の学問がどの程度までパイディアの歴史に属するののかという問いに、まったく新しい光が投げかけられる。医学 (medical science, die ärztliche Wissenschaft) は、理解力のある公衆に医術問題や医術思想をながしかほのめかす以上のことをなす。その、人間生活の一領域、つまり身体の領域への集中をとおして、それは、哲学の、人間性 (人間本性) の新しい像 (a new picture of human nature, eines neuen Bildes der menschlichen Natur) を作り出すという仕事にとって決定的に重要となる発見をなし、そしてそれによって医学は、個人を人間性の理想によりぴったりと形成することに (in moulding the individual more closely to the ideal of humanity, für die vollkommeneren Formung des Menschen 人間のより理想的な形成にとって) 役立つのである。

<注記と考察>

(1)ここは、ドイツ語版では「身体の適切な治療というすべての医術学説は、魂の適切な世話と治療というソクラテースの学説とつなぎ合わされて、より高い第三のもの (einem höheren Dritten) となる。」という表現になっている。つまりイエーガーは、「身体の適切な治療」という考え方を重視する医術は、それがソクラテースの哲学に取り入れられたことによって新しい次元の思想の一部になった、と述べている。

◀原文注記▶

35. 「古来の医術について」1 f. and 12.
36. Ib. 5 f. and 8.
37. Ib. 4, and the end of 5.
38. Ib. 8-9.
39. Ib. 9: Δει γὰρ μέτρου τινὸς στοχάσασθαι. μέτρον δὲ οὔτε ἀριθμὸν οὔτε σταθμὸν ἄλλον, πρὸς ὃ ἀναφέρων εἴση τὸ ἀκριβές, οὐχ ἄν ευροίς ἀλλ' ἢ τοῦ σώματος τὴν αἴσθησιν. 同節では、医者が舵手と比較されている。
40. 「古来の医術について」第20節を参照のこと。この主題について、相当数の著述家たちは、この論争はとくにエンペドクレスとその学派に向けられているという間違った考えの中毒になっている。アナクサゴラス⁽¹⁾あるいはディオゲネース⁽²⁾がその対象であったとしてもよいのである。φιλοσοφίη ('intellectual work', 'study') はまだ明瞭には定義されていなかったのであり、エンペドクレスの名は、それを明瞭にするために使われていて、同じやり方でアリストテレス (*Protr.* frg. 5b Walzer, 52 Rose) は 'metaphysics (形而上学)' の概念、それに対してはこれまで特別な言葉は

なかったものであり、そのもっともよく知られた代表的人物の名を挙げることによって、その概念の説明をしている。‘アナクサゴラスやパルメニデース⁽³⁾によって実践された、その種の真理探究 (ἀληθείας φρόνησις)’ と彼は述べている。もしわれわれが ‘philosophy’ 概念の正しい歴史を打ち建てようとするならば、これを確定することは重要であって、ヘーロドトス⁽⁴⁾、ヘーラクレイトス⁽⁵⁾、さらにピュータゴラス⁽⁶⁾にまで遡ってその源の年代を定めるために絶えざる試みがなされている。On ancient medicine (「古来の医術について」)の著者はさらに進んで、‘これによって’ (つまりエンペドクレースの哲学ということで) ‘私は、人間とは何か、その源は何かを教える、あの種の研究 (resarch, der Forschung) (ἵστορίη 研究、探究) を意味する’ と言う。⁽⁷⁾

41. 「古来の医術について」第20節
42. Ib. 20
43. それで ‘Επιδημία—‘異国の諸都市への訪問 (Visits, Besuche)’ という表題がついている。⁽⁸⁾ その職業の本質が異国の諸都市を訪問すること (ἐπιδημειν) にあるのは、ただソフィストたちや文筆家たちだけではないのであり、プラトーンの『プロータゴラス』309 D, 315 C, 『パルメニデース』127 A やキオス島の詩人イーオンの自叙伝的著作、それもまた ‘Επιδημία と呼ばれている⁽⁹⁾、を参照されたい。旅する医者たちも、同じことをしたのである—「空気、水、場所について」第1節を参照のこと。ヒポクラテースの ‘Επιδημία の著者たちは、「古来の医術について」を執筆した者と、その執筆者はおそらくかの著者たちの誰とも同一ではないけれども、知的な盟友である。
44. 「箴言」第I章1節。デーメトリオス⁽¹⁰⁾の『文体について』は、この有名な一文を、そっけない、ぎくしゃくした文体の雛型として引いているが、そのものの精神はその内容によってのみ認められ得る。
45. ヒポクラテースの著作における *eidos* (これは非常にしばしば複数形で現れる) と *idea* の概念の発生は、A. E. Taylor の *Varia Socratica* (Oxford 1911) 178~267, その他によって研究されてきている。より最近のものとしては、G. Else, *The Terminology of the Ideas* (Harvard Studies in Classical Philology, 1936) を参照のこと。
46. 12章の εἶδεα、23章の εἶδεα σχημάτων、などを参照のこと。⁽¹¹⁾
47. 第15章(節)の終わりを参照のこと：熱は、それに特有と見なされるような大きな効力 (force, Kraft, δύναμις) をもってはいない。(畑注記；『ヒポクラテース全集 第1巻』では、「強い作用のあるのは、熱ではなく、…」と訳されている。) さらに、第14章(節)の第2の部分参照のこと：体内で作用する諸力について、その数、種類、適切な混合、そしてその攪乱。⁽¹²⁾
48. Alcmaeon frg. 4 Diels.
49. このことは、彼の、身体の中で効力をもつ (active, wirksam) ‘無数の’ 力 (forces, der Kräfte) がある、という学説によって証明される。第15章(節)における彼の、温、冷、乾、湿という基本性質を分離し実体化するその当時の慣例に対する反対論を参照のこと。
50. プラトーン 『ゴルギアース』464 b 以下と、とくに465 a; 501 a. 以下。『パイディア』

- 第Ⅱ巻、131 p と148 p を参照のこと。⁽¹³⁾
51. プラトーン『パイドロス』270 c-d⁽¹⁴⁾；W. Capelle はこの一節についての古い文献の一覧を *Hermes* 57, p 247 で作成している。この問題の最近の扱い、つまりこの章の注記14で引いている L. Edelstein の著作、私はそれを常に正しいと思っているわけではないが、それをここでは論じることはできない。
52. C. Ritter, *Neue Untersuchungen über Platon* (Munich 1910) p. 228 f.
53. 「急性病の撰生法について」(三) を参照のこと。⁽¹⁵⁾ そこでは著者は、クニドス医学学派の医者は病気の多様性 (πολυσχιδίη) を強調し、それぞれが現れる型 (forms, der Formen) の正確な数を確定しようとしてきていたが、しかし名目上の多様性に騙されてきていた。彼はまた複数の病気の型 (forms) を一つの *eidos* にまとめる必要がある、ということを行っている。*On breaths* (「体内風気について」)⁽¹⁶⁾ の著者はこの点で、第2章において、極端なことを言っている：彼は病気の多くの性質 (πολυτροπίη) を否定し、ただ一つの *τρόπος* (性質) があると、それはしかしその *τόπος* (場所) の相違にしたがって多くの形 (forms) へ区分されると、主張する。
- 53 a. プラトーンにも初期哲学者たちにも興味を起ささせる別の問題がある。「古来の医術について」の第15節で著者は、実際には、孤立し、いかなる他の *eidos* とも関係をもたない (μηδενὶ ἄλλω εἶδει κοινωνέον)、熱、寒、乾、湿のようなものは存在しない、という。⁽¹⁷⁾ プラトーンも、『ソピステス』257 a 以下で、γένη あるいは εἶδη (cf. 259 e) の間の *κοινωνία* (共同関係、共有) のことを話しており、参照のこと。⁽¹⁸⁾
- 53 b. たとえばプラトーン『政治家』299 c；アリストテレス『ニコマコス倫理学』2.2.1104 A 9, 3.5.1112 b 5；『古来の医術について』の第9章(節)後半。⁽¹⁹⁾
- 53 c. アリストテレス『ニコマコス倫理学』10. 10. 1180 b 7。⁽²⁰⁾
- 53 d. プラトーン『ピレーボス』34 e-35 b, 35 e f。⁽²¹⁾
- 53 e. アリストテレス『ニコマコス倫理学』2.5.1106 a 26-36, b 15, b 7. 上記の注記39で引用した、「古来の医術について」9節を参照のこと。⁽²²⁾
54. 4世紀医術文献に、「古来の医術について」のこの一節の模倣が他にもある。Diocles of Carystus, frg. 138 Wellmann、それに「食餌法について」I. 2における論争 (Littre vol. IV, second half) を参照のこと。⁽²³⁾ その一節の著者は、一般的規則 (rule, Regel) が患者個人の本質 (nature) に正確に適合され得るなどということ、否定しているのであり、その点に、著者はあらゆる医者の技術の不可避的な弱点を見ている。
55. 『パイディア』第2巻、44, 145 f. を参照のこと。

<注記と考察>

- (1) アナクサゴラス：小論第4章の<注記と考察>(5)を参照。
- (2) ディオゲネース：前499年頃～前428年頃。「折衷主義の哲学者。「ソクラテース以前の哲学者」のうち最後の人と見なされている。アナクシメネースの弟子。万物の始源 *arkhe* を「空気 *aer*」と見なす師の学説と、アナクサゴラス、レウキッポスらの学説とを融合させ、アルケーたる空気が濃化ないし稀化することによって万物が生成され、精神(知性)の素もまた空気であると主張。著書『自然について *Peri Phuseōs*、*Περὶ φύσεως*』は断片のみ伝存。アテーナイに住み、青年時代のソクラテースの師

- の1人であったと考えられる。」ということである。(松原著)
- (3) パルメニデース：前515/510年頃～前450年以降、あるいは、前540/535年頃～前483/475年頃。ギリシアの哲学者で「エレア学派の祖。形而上学の父。」とされる。「パルメニデースは「在るものは在り、無いものは無い」という命題から出発して、厳密な演繹を行ない、「在るもの」は永遠に不生不滅・不変不動・不可分で等質の完結した球体であると主張。生成消滅を説くイオーニア派の自然哲学（タレース、アナクシマンドロス、アナクシメネースらのミーレートス学派）やヘーラクレイトスの「万物流転」説を斥け、理性のみが真理の基準であり、感覚で捉え得るものは虚偽であるとした。」という。また、「パルメニデースはひとり独自のエレア学派を確立したというに留まらず、その鋭い論理的思考によって当時の思想界に鮮烈な衝撃を与え、以後のギリシア哲学に影響するところ甚大であった。また、初めて地球が球形であると宣言し、月がその明るい面をつねに太陽に向けていることを観測したという。」と説明されている。(松原著)
- (4) ヘーロドトス：前484年頃～前425年頃。ギリシアの歴史家で、「畢生の大著『歴史 Historiai』は、まとまった形で現存するギリシア最古の史書で、ペルシア戦争（前492～前479）を中心に、大旅行によって自ら採取した知識を豊かに織り込んでおり、その輝かしい業績のゆえに彼は「歴史の父」と称されている。イオーニア方言の散文で記された本書は、おそらく未完であって、ヘレニズム時代にアレクサンドレイアの学者らにより、現行のごとく9巻に分けられ、おのおの9柱の女神ムーサイ（ムーサたち）の名で呼ばれるようになった。」という。また、「ヒストリアイなる語は、元来「調査・研究」を意味していたが、ヘーロドトスの著書を境に「歴史」「物語」をも意味するようになった。」という。(松原著)
- (5) ヘーラクレイトス：前540年頃～前480年頃。ギリシアのイオーニア学派の哲学者で、「彼は宇宙の始源 arkhe を「火」と見なし、万物は相反するものの闘争と統一に従って生成するが、絶え間なく変化する事象も、世界を支配するロゴス logos（理法）により全体として調和が保たれていると主張、真の智はこのロゴスを知り、それに従った生活を送ることにあると説いた。「万物は流転す Panta rhei, πάντα ῥεῖ」 「同じ河に2度入ることはできない」「太陽は日ごとに新しい」等々、神託に似た箴言風の言葉で知られる。『自然について Peri Physeos』なる初期ギリシア散文体の著作があったが、散逸して短い引用断片130余篇が残存するのみである。」ということであり、「ヘーラクレイトスの思想は、プラトーン哲学やストア学派、さらにキリスト教徒にまで影響を及ぼしている。」という。(松原著)
- (6) ピュータゴラス：前582/581年頃（または前572年頃）～前497/496年頃。ギリシアの哲学者・数学者・宗教家で、イタリア派哲学の創始者とされ、「エジプトをはじめオリエント各地を旅行して先進文明を修得、自らを「愛知者 philosophos, φιλόσοφος（＝哲学者）」と名乗る最初の人物となった。サモスに帰国するが、前530年頃、僭主ポリュクラテースの暴政を厭い、南イタリアのクロトーンへ移住。自身の教説に基づく宗教的結社ピュータゴラス教団 Pythagoreioi, Πυθαγόρειοι を組織し、多数の門弟を擁して政治を左右するほどの勢力を築いた。靈魂の不滅や輪廻転生、死後の応報を説き、解脱を得るために肉食の禁止や無言の行などの戒律を課した。」という。また「教義は

秘伝で書物を著わさなかったが、数学や音楽を深く研究し、「ピュータゴラスの定理(ラ)Theorema Pythagorae」や音階のもつ数的関係を発見(「ピュータゴラスの定理」は早くよりバビュローニア人の中で用いられており、彼はそれをギリシア世界へ導入したに過ぎないが)、万物の根源 *arkhē, ἀρχή* を「数」に求めるに至った。天文学の分野では、地球は球体で自転しており、なおかつ宇宙の中心たる火の周囲を一定の数学的法則に従って回転していると説いた。友愛をきわめて重んじ、「友のものは共有」「友は第2の自己」という言葉をはじめて揚言したとされる。また「ピュータゴラス教団は、師の没後、反対党の陰謀により離散し、各地へ亡命(前5世紀中頃)、やがてタラス(タレントゥム)を中心として活動を続けるようになったものの、学派と教派に分裂し漸次弱体化、前300年頃消滅した。なお彼らは、幾何学よりも数論を重視し、数学的理論を音響学や天文学説に適用、発展させた。ローマ帝政期にピュータゴラス派 *Neopythagoreioi* が再興され、数秘学や降神術 *theurgia* の分野で活躍、グノーシス主義を通してキリスト教思想にも大きな影響を及ぼした。」という。(松原著)

- (7)この注記のイエーガーの指摘は重要と判断される。イエーガーの続く論述のことも考え、確認のため、「古来の医術について」第20節をやや長く引いておく(『ヒポクラテス全集 第1巻』)。

「ある医者や知者たちはつぎのように説いている。およそ人間が何であるかを知らない者は医術を知ることはできない、人間を正しく治療しようとする者はこれをしっかり知っておかなくてはならない、と。しかし、そういう人たちの論は哲学説であって、ちょうどエンペドクレスやその他の人たちが自然について書き、いったい人間とは何であるか、人間ははじめどのようにして生じたか、何から組み立てられているかを論じたものに似ている。そのような知者や医者が自然について言ったり書いたりしたことは、絵画術ともちがうが、医術とはもっとも遠く隔たっていると私は考える。しかし自然についてのことは、本当は医術以外のどこからも何か確実なものを知ることはできないのだと考える。ただしこれをはっきりと知るの、医術そのものを全体として正しく把握してはじめて可能なのであり、それまではどうも不可能だと思われる。さて、そのように医術をきわめてこそ、人間とはいったい何であり、どんな原因によって生ずるのか、またその他のことを正確に知ることができる、というのが私の主張である。それはまさに、およそ医者であればだれもその務めを何らか果たそうと心がける以上、自然についてつぎのことをよく知り、また知ろうと懸命に務めなければならないと私には思われるからである。すなわち、人間は飲食物に対してどういう関係にあるか、他の習慣に対してはどうか、それらの各々からそれぞれの人にどういうことが結果として生ずるかをである。つまり、チーズは有害な食物である、なぜならそれを腹一杯食べた人は苦しむから、というぐあいに単純に考えてはならないのであって、問題は、それがどんな苦痛を与えるのか、何が原因でそうなのか、それは人間のなかにあるもののうちの何に合わないのか、なのである。実際のところ、チーズ以外にも性質からいったままたま害となるような飲食物が数多くあり、人間にたいしてさまざまにそれぞれちがったやり方で影響を及ぼすのだから。…」

- (8) ヒポクラテース全集の中の、広く「流行病」(ローブクラシカルライブラリーでは、ΕΠΙΔΗΜΙΩΝ, EPIDEMICS) と訳されている全7巻の著作について、その表題の訳し方をめぐる論議があるということである。大槻真一郎編著『ヒポクラテース全集』第3巻所収の「流行病諸篇についての解説」は、この経緯について詳細に論じている。そこで大槻は、「…しかし、この題名に関して別の解釈の余地があることは、ガレノス自身が『流行病』第六巻注釈のなかで明らかにしている。その別の解釈とは、とくに近年ドイツの古典学者イエーガーが指摘して以来、諸研究家のあいだで注目されるようになったもので、この題名をギリシア語の字義どおりに「諸都市・諸地域を訪問した際の記録」(ἐπιδημία < ἐπι-δῆμον. δῆμος は「人々、民衆」の意味) と解する。」と指摘し、イエーガーの論述をほぼ全面的に受け、結論として「以上述べたように『流行病』全篇の表題を ἐπιδημία (「ある都市や地域に赴くこと」) という語との関連において説明づけるという解釈は、それに対するガレノスの異論はどうあれ、このように広範囲にわたるギリシアの諸都市や諸地域で医療活動を展開していたヒポクラテースと彼の医学派の実態、さらに、そうした医療活動を母体として生まれたこの種の文書の基本的性格を的確に伝えるものである。」と述べている。(529 p~531 p)
- (9) イーオン (キオスの) : 前490/480年頃~前422年頃。「キオス島出身の詩人、著述家。主にアテーナイで活躍し、アイスキュロス、ソポクレス、エウリピデースおよびエレクトリアのアカイオス Akhaios (前484/481~?) と並んで5大悲劇詩人と称された。裕福にして温厚な人柄の持主で、キモン、ソークラテースらアテーナイの著名人と親交を結び、その著『面談録 Epidēmiāi, Ἐπιδημίαι』は彼らをめぐる逸話…(略)…の源泉となった。多くの作品があったが、いずれもわずかな断片しか伝存しない。」とされる。(松原著)
- (10) デーメトリオス (パレーロンの) : 前350/345年頃~前283年頃。「アテーナイの政治家にして著述家、弁論家、ペリパトス (逍遙) 派の哲学者。」で、「…のちエジプトのプトレマイオス1世のもとへ赴き、アレクサンドレイア図書館や学堂ムーセイオン Museion の建設に尽力し、書籍収集や学術研究に貢献した (前297~)。」とされ、「多作の人で、歴史・弁論・政治・倫理・文学批評に関する論文と書籍のほか、金言集やアイソーボス (イーソップ) の寓話集など多方面にわたる書物を著わしたが、すべて失われた。」という。「現存するギリシア語の論考『文体について』Peri hemeneias, Περὶ ἑρμηνείας は、このパレーロンのデーメトリオスの名のもとに伝えられているが、実際はヘレニズム時代末期ないしローマ時代 (前1世紀~後1世紀頃) のペリパトス派の著作家の手になるものと見なされている (タルソスの文法学者デーメトリオス執筆説あり)。」ということである。(松原著)
- (11) 「古来の医術について」の、第12章 (節) には、「しかし医術の多くの分野 (εἶδη, departments) ではそれほどの正確さにまで達してきている。」と記述されている。また23章 (節) には、「体の形態は、以上のほかにも内部外部ともに種類が多い。(There are many other structural forms, Πολλὰ δὲ καὶ ἄλλα καὶ ἔσω καὶ ἔξω τοῦ σώματος εἶδη σχημάτων.)」と記述されている。(『ヒポクラテース全集 第1巻』、挿入したギリシア語、英語はローブクラシカルライブラリーに拠る。)
- (12) イェーガーが指摘している箇所は、「…実際に彼らは、これらのものが人体の中に

あってしかも人体を害することを見てとったのである。というのも事実、苦いもの、塩辛いもの、甘いもの、酸っぱいもの、渋いもの、水っぽいもの、その他、種類と強度の点で千差万別のものが人体の中にはたくさんあるからである。さてこれらが互いに混ぜ合わされ和合するならば、決してそれだけでは目立った働きは見せず、人を害することもない。しかし他方、これらのうちの何かが分離され、それだけの作用が目立つようになるとともに、人を害しもするのである。」という叙述になっている(『ヒポクラテス全集 第1巻』)。ところで訳者は、ここに、イエーガーの論旨に重なる、次のようなことを注記している。

「ここでは実に多くの性質が示唆されており…。この論文の作者は数多くのものをそれぞれ並列的にあげているが、当時の新しい自然哲学的傾向としては、一とか二、三、四といったできるだけ少ない基本的な性質とか物にしぼっていく動きが顕著であり、この論文の作者の思考とは異なっている。」(p 84)

(13)『ゴルギアース』の該当箇所は、次のとおりである(加来彰俊訳『ゴルギアース』岩波文庫、による)。

「ソクラテス つまり、わたしが言いたいのは、身体や魂が、実はちっとも良い状態にはないのに、良い状態にあると思わせるようにするものが、身体の場合にも、また魂の場合にも、あるということなのです。

ゴルギアース それは、あるね。

ソクラテス さあ、それでは、できることなら、もっとはっきりと、わたしの言おうとしていることを、あなたにわかってもらうようにしましょう。——対象はいま言われた二つなのだから、それに応じて二つの技術があるわけです。すなわち、魂のための技術は、これを政治術と呼んでいるのですが、他方、身体のための技術には、そうすぐとは一つの名称をあたえることはできません。けれども、身体の手をやるという点では、それは一つのものであって、そのなかには二つの部門があると言っているのです。つまり、その一つは体育術であり、もう一つは医術です。これに対して、政治術のなかで、体育術に相当するものは立法術であり、また医術に相当するものは司法です。…」(464 B…以下は略す)

「(ソクラテス) …さて、こういったことこそ、わたしが迎合と呼んでいるものなのです。そして、そのようにするものは醜いと、ぼくは主張しているのだよ、ポロス。——というのは、これは君に対して言うことだからね。——なぜなら、それは最善ということを見捨て、快いことだけを狙っているからなのだ。また、そういう料理法のようなものは、技術であるとは認めずに、むしろ経験であると主張しているのだ。なぜなら、それは、自分の提供するものが本来どんな性質のものであるかについて、何ら理論的な知識を持たず、したがって、それぞれのものを提供するにあたって、その理由を述べることができないからである。しかしぼくとしては、およそ理論を見捨てたものなら、そのようなものを技術とは呼ばないよ。だがもし、それらの点について君に異論があるなら、質問を待って説明することにしたいと思う。…」(465 A)

「ソクラテス さあ、それでは、ぼくがこの人たちにも話しておいたことだが、あのときぼくの話していたことは正しかったと君に思われたのであれば、どうか

その点は、しっかりと確認しておいてくれたまえ。ところで、あのときの話というのは、こういうことだったように思う。すなわち、料理法は技術ではなくて、経験であるとぼくには思われるが、他方、医術のほうは技術なのである。というのは、その一方のもの、つまり医術のほうは、自分が世話をしてやるものの本性をも、また自分が取り行なう処置の根拠もよく研究していて、そしてそういったことの一つ一つについて理論的な説明を与えることができるのだが、これに反して、もう一方のものは、快楽——その快楽を目あてに奉仕するというのが、その行なう仕事の全部なのであるが——その快楽へと、文字通りに非技術的な仕方、向って行くのである。つまり、快楽の本性をも、その原因をも調べてみることはしないで、全く理論を無視したやり方で、分類して数え上げるというようなこともいわば何一つすることなく、ただ熟練と経験にたよって、通常よく起ることの記憶を保存しているだけにすぎないのであるが、そうすることによってまた、快楽をもたらすことに成功しているわけなのだ。…」(501 A…以下は略す)

(14) 『パイドロス』270 c-d は、小論Ⅱ、第3章の〈注記と考察〉(7)を参照。

(15) 「急性病の撰生法について」(三)は、次のとおりである。(『ヒポクラテス全集 第1巻』)

「もしそれらの薬剤がすぐれていて、投与を勧めていた病気によく合うのなら、薬はわずかな数だけあればそれで十分だということになるわけだから、彼らはもっと褒められていてもよいはずである。しかし現実是这样になっていない。もっとも、個々の病気に対して処方すべき薬剤については、後になってその教本を手直した人たちが医療の向上にかなりの貢献をした。しかし撰生法については、彼ら昔の人々は何もたいしたことは記さず、大切なのにそのことを気にとめなかった。ちなみに彼らのなかには、一つの病気でもそれにはさまざまな方向性があるってさまざまに分化していく、ということに気をとられていた者がいて、その人たちは、一つの病気がいくつに分けられるかを明瞭に示そうとしたが、正確なことは書き記せなかった。実際、ある患者の症状は別の患者の症状とはどこか異なっている、というように病気を区別していき、同じ名称で呼べない以上は別の病気だと思ひ込むとしたら、病気の数はほとんど無数にふくれあがってしまうであろう。」

(16) *On breaths* は『ヒポクラテス全集 第1巻』では「体内風気について」と訳されている。その三節には、「体の中にある空気は体内風気 (*Wind in bodies is called breath*) (体内ガス) と呼ばれ、体外の空気は大気と呼ばれる。」という一文がある(挿入の英語はローブクラシカルライブラリーに拠る)。

イエーガーが指摘している第二節は次のように訳されている。

「病気はすべて、その発生する仕組みは同じであるが、発生する場所がちがう。実際のところ、病気は、発生する場所がいろいろと異なり類似していないために、決して相互に似てはいないようにみえる。だが、すべての病気の実体と原因は同一なのである。それがどのようなものか、私はこれからの論述で説明していこうと思う。」

なおイエーガーの論述中の *τρόπος* は「方向、ありよう、性質」などの意味があり、

τόποςは「場所、地域、国土」などの意味がある。

- (17) 「古来の医術について」のイーガーが引いている箇所(第15節)は、次のように訳されている(『ヒポクラテス全集 第1巻』)。

「実際のところ、思うに彼らは、熱・冷・乾・湿のどれをとっても、他のいかなる形質ともいっしょにならないままそれ自体として発見してはいないからである。(For they have not discovered, I think, an absolute hot or cold, dry or moist, that participates in no other form.)」(挿入英語はローブクラシカルライブラリーに拠る。)

- (18) 『ソピステス』の257 aには、「**エレアからの客人**……いやしくも(類)というものが、相互に関係をもち合うことをその本性とする以上はね。(…, since by their nature the classes have participation in one another.)」という、また259 eには、「**エレアからの客人**…なぜならわれわれにとって、言表とは、〈形相〉相互の組合せにもとづいて成立するものであるから。(For our power of discourse is derived from the interweaving of the classes or ideas with one another.)」という、‘プラトーン’のことばがある。

(岩波書店『プラトン全集 3』1976年、より、挿入の英語はローブクラシカルライブラリーに拠る。)

- (19) 『政治家』299 cには、「…つまり、法律を守ることなく操舵術や医術に関与しつつ船舶や病人たちにたいして絶対的な権限を帯びて支配権をふるうように、…」という叙述がある。(『プラトン全集 3』岩波書店、1976年、所収)

『ニコマコス倫理学』の2.2.1104 A 9には、「…事実、個別に関する取扱いがいかなるふうであるべきかは、学術からも、またいかなる一般論的な勧告からも期待できないのであり、その局にあたって行為するところのひとびとが、常にみずから、その機宜に適したところを考えることを要する。ちょうど医療とか航海の場合がやはりそうであるごとく——。」という、また.1112 b 5には、「われわれが思量するのはむしろ、およそわれわれによって、ただし常に同じ仕方においてではなしに、行なわれるところのことがらについてである。たとえば、医療とか蓄財とかの方面におけることがらがそれであり、また、航海に関しては体育に関してよりも(厳密でないだけにそれだけ)より多くわれわれは思量するのであって、その他の場合もこれに準ずる。」という叙述がある。

また『古来の医術について』の第9章(節)後半は、次のようである。(なお前半に関しては、小論第1節の〈注記と考察〉(11)を参照のこと。)

「…実際のところ、大半の医者には下手な舵取りの場合と同じであると私には思われる。なるほどそういう舵取りは、海が穏やかなとき何かの不始末をしでかしてもあまり目立たないが、ひどい嵐や強い風が彼らをおそおうものなら船を失い、すべての人々の目にその無知と無能ぶりが露呈することになる。それと同じように、大半のつたない医者たちも、大病をかかえていない人を治療するときは、大きな過失をおかしてもそれが恐ろしい結果を招くことはない。事実、病気の大半はそうであって、しかも人間は重い病気よりもそれらの病気にかかることのほうがずっと多いのである。そうした病気の場合に何か不手際があったとしても、素人目にははっきりわからない。ところが、重く厄介でしかも危険な病気に出くわ

したとき、そのときこそ、彼らの過ちと術の未熟さが誰の目にも明らかになる。実際そうした過ちからくる報いは、舵取りの場合にしる医者の場合にしる、ゆっくりではなく、またたく間にやってくるものだから。」(『ヒポクラテス全集 第1巻』)

(20) 『ニコマコス倫理学』の1180 b 7を中心に、やや広く確認しておく、次のようである。

「こういった任務に耐える可能性の比較的多いのは、さきに述べきったところからすれば、やはり、立法者の素養を積んだひとであると考えられよう。けだし、公共的な心遣いは明らかに法律を通じて行なわれ、よき心遣いはすぐれた法律を通じて行なわれる。しかるに、法律は成文法であっても或いは不文法であってもいいわけであるし、また、法によって教育さるべき人間は一人であっても大勢であってもいい——ちょうど音楽や体育やその他のもろもろの営みについてもそうであるように——と考えられるであろう。事実、国においては国の法制や習俗が力を有しているが、これに該当するものとして、家においては、家父のこゝばや習慣づけというものがある。しかも後者におけるほうが、お互いの親縁性と父親の施善のゆえに、かえってこうした力はもっと強い。家人は本性的に情愛と従順をもって出発するからである。そして個別的な教育にはまた共同的教育よりもすぐれた点がやはりあるのであって、それはちょうど医療の場合に似ている。というは、一般的にいえば、熱のあるひとには安静と絶食が有効であるが、或る特定のひとの場合においては必ずしもそうはいかないからであって、また、拳闘の達人もあらゆるひとびとに必ずしも同じ手を仕込みはしない。個別がより多く精密を期しうるのは、それゆえ、心遣いが私的に行なわれる場合であると考えられるであろう。けだし、ここでは、各人それぞれが適切な処置を受けることがより多いからである。もとより、しかし、ひとつひとつの場合に応じて、最もすぐれた心遣いをなすことができるのは、やはり医者とか体育家とか、その他すべて「何があらゆるひとびとにとって、または、かくかくのひとびとにとってよくあるかということを一般的な仕方を知っているところのひと」にほかならない。事実、学問とは普遍にかかわるものだとされているし、事実またそれはそういうものなのである——もっとも、…」(高田三郎訳『ニコマコス倫理学』、岩波文庫(下)、1973年)

(21) 『ピレーボス』34 e-35 bの中の一部、それに35 eを下記に引用しておく(『ピレーボス』、『プラトン全集 4』岩波書店、1975年、所収)。

「ソクラテス それなら、そもそも渴とは欲求なのかね。

プロタルコス そうです、飲物の欲求です。

ソクラテス 欲求されているのは飲物なのだろうか、それとも飲物による充足だろうか。

プロタルコス たしかに充足の欲求だと思います。」

「プロタルコス それはどういうことがらにおいてというのでしょうか。またお話しくださるのは、生き方のどのような形についてなのでしょう。

ソクラテス 充足されたり、空になったりすることにおいて、そしてまたすべて

動物が生命を安全に保つとか失うとかいうことにかわりのあることがらにおいてということなのだ。そしてわれわれのうちの誰かが、これらの二つの情態のどれか一つにおかれるとき、その変化に応じてあるいは苦しみ、あるいは愉快になることがあるとすれば、ということだ。

プロタルコス それはそういうことがあります。

ソクラテス しかしこれらの中間におかれたとしたら、どうかね。

プロタルコス 中間って、どういうふうにですか。

ソクラテス それはひとが現在の情態によって苦しんではいるが、しかしこの苦しみはあるものが現われればやむという楽しい思いを——その充足はまだ現実不起っていないけれども——心にもっている場合、そこに見られるのは何なのか。われわれはその者を二つの情態の間にあるというべきだろうか、それともそう言ってはならないのだろうか。

プロタルコス むろん、そう言うべきです。

ソクラテス どっちだろうか、その者は全体として苦しんでいるのだろうか、それとも愉快にしているのだろうか。』

- (22) 『ニコマコス倫理学』の1106 a 26-32の該当箇所は、やや長く引いておくと、次のとおりである（高田訳）。

「すべて連続的にして可分割的なものにおいては、われわれは「より多き」（プレイオン）をも、「より少なき」（エラットン）をも、「均しき」（イソン）をも取ることができる。そしてそれも、ことがらそれ自身に即してであることもできるし、またわれわれへの関係においてであることもできるのである。「均」とは、超過と不足との何らかの意味における「中」（μέσον, mean）にほかならない。いま、ことがら自身についての「中」とは、両極から均しきだけを離れているところのもの、この意味における「中」は万人にとって同一である、）われわれへの関係における「中」とは、これに対して、多すぎず不足しないものの謂いである。これは一つでなく、万人にとって同じではない。たとえば、もし10では多いが2では少ないというとき、ことがらに即して「中」をとるならば6が「中」である。それは均しきだけを超過した超過されているからであり、すなわち算術的比例における「中」項にあたる。だがわれわれへの関係における「中」はそんなふうにして決定されることができない。けだし、もしそうだとするならば、10ムナでは食べすぎであるが2ムナでは足りないという場合、体育指導者は6ムナを命ずればよいことになるであろう。実際はしかし、6ムナでは、おもうに、それを取るべきひとによっては或いは多く或いは少ない。たとえばミロンにとっては少なく、体育を始めたばかりのものにとっては多いというごとく——。競争や角技の場合も同様である。かくして、すべて識者は超過と不足を避け、「中」を求めてそれを選ぶ。ただし、この場合における「中」とは、ことがらに即してのそれではなく、われわれへの関係におけるそれなのである。」（挿入したギリシア語、英語はローブクラシカルライブラリーに拠る。μέσος は、「中央の、中間の、中庸を得た」などの意味があり、mean も同様の意味をもつ。）

- (23) 「食餌法について」第1巻2節の訳文で、訳者は、「古来の医術について」で批判さ

れている箇所、また「古来の医術について」と同主旨になっている箇所、について注記している。(『ヒポクラテス全集 第2巻』)

Ⅲ. 現代日本の教育研究における古代ギリシア思想の理解：考察ノート①～継続研究(6)における～

〔イエーガーは『パイデア』第1巻の「序文」で、「今日でも、ギリシア的教養の徹底的な、根源的な理解抜きにはいかなる教育の意図や知識をもつことも不可能である。」という確信がこの著を生んだと語り、「この本は学者にだけではなく、千年間の文明を維持しようとする我々の時代の奮闘のなかであって、ギリシアに近づく術を再発見しようと努めるすべての人びとのためにも向けられている。」と述べている(本継続研究(3)、Ⅱ、1の<訳文①>)。翻って現代日本の教育思想研究において、古代ギリシア思想はどのように受け止められてきているのだろうか。このことを考察していくために、1945年以降の著述(事典類)からの抜粋等を、吟味するための参考【資料】として、ここでは注釈抜きで、掲載しておく(発表年度順に配列する)。〕

【資料-1】

勝田守一・五十嵐顕・大田堯・山住正巳編『岩波小事典 教育 第2版』(岩波書店、1973年) *この「第1版の序」(1956年)は勝田守一によるもので、「この仕事は実質的には、五十嵐顕・大田堯両君との共同執筆・編集にかかるものである」と記されている。その事典項目のなかの「プラトン Platon 前427?～前348?」全文を引いておく。

「ギリシアの哲学者。いわゆるイデア論を大成し、西洋の哲学の源流となる。彼の哲学の背後には、矛盾をはらんで危機に面していたギリシアのポリスの社会があった。ソクラテスの影響を受け、哲学的探究に身を捧げるにいたったが、ソクラテスが国によって死刑に処せられたのちは、現実の国家に失望し、理想国家の理念を抱いた。理想国家は、権力の位置につくことを欲しない永遠のイデアの認識に達した哲人によって治められる理想世界である。かれの教育論は《国家論》(Politeia)に主として展開されるが、それは哲人支配者をいかにして育てるかを主題としている。理想国家は、善のイデア(idea)を国家に実現したものである。それは、社会を構成する統治者と防衛者と生産者の3階級が、それぞれの徳を実現し、全体としての調和、すなわち正義を実現することにほかならない。この実現には、善のイデアを認識した統治者によるほかはない。このような哲人統治者を育てるためには、すぐれた子弟を選び、音楽と体育とによって心身の調和的な発達をはかり、次に算術を学んで、感性的な相対的变化の世界から、不変な世界の認識に達せしめ、ついで幾何学、天文学、音楽理論を学ばせる。この予備教育を終わって、最高の学問であるイデアの認識の学問、すなわち弁証法(dialektikē)の学習に入る。このようにして永遠の真理の世界に達したものはふたたび現実の感性界におり来って実践的な訓練を受ける。こうした過程で、そこまで達し得ないものは、あるいは防衛者として、あるいは生産者として、それぞれの分を守る。プラトンの教育論は、スパルタの制度の影響を受けたといわれるが、かれの学的態度そのものと密接な関係があ

る。それは西洋の教育思想に大きな影響を与え、いくたびかその思想はかえりみられてきた。ルソーの社会理想の構想にはプラトンの影響がみられる。しかしプラトンが奴隷社会の制度を受け入れていることは、その教育思想においても、生産技術と科学的知識を切りはなしてしまったことに現れている。そしてそれは西洋の人間教養概念に長くあとをひいている。」

【資料-2】

教育科学研究会編著『現代教育科学入門』（大月書店、1990年）

第Ⅳ部「人類の未来と教育科学の構想」の第4章「教育の探究と教育科学の構想」の「2 総合的な人間科学としての教育科学」という節でパイディアへの言及があり、その箇所を引いておく。

「…そしてこの分野での実践的分析が、人間形成に対する意図的な術（アート）としての教育のあるべき姿の探求に客観的な根拠を示すのである。このような客観的な根拠を示すことこそ、古代以来さまざまな形で展開されてきた教育学（パイディア）の伝統を、現代において科学として発展させる道である。教育が人間的「主体化」にたいする意図的・意識的いとなみであるとすれば、そこにおいて従来の教育学がこれまで独自に発展させてきた分野を、私たちはいっそう発展させなければならない。」

なおこの文章中の「パイディア」には、「paideia 古代ギリシアにおける一般教養の理想を示すことば。ヨーロッパにおける教養論の基礎をなす。広川洋一『ギリシア人の教育』岩波新書、1990年。」という注記が付されている。

【資料-3】

教育科学研究会編『現代教育のキーワード』（大月書店、2006年）

基本項目の一つ「教養」は、＜教養概念の淵源にある問題意識＞＜古典的教養の限界＞＜戦後日本社会における教養の再定義＞＜多元化社会の教養に向けて＞という構成で書かれている（執筆者：小林大祐）。ここでは、その中の最初の二つの項目を引いておく。

＜教養概念の淵源にある問題意識＞

「ヨーロッパにおける教養概念の淵源のひとつは、古代ギリシャ語のパイディア（paideia）である。古代ギリシャの人々は、人間の諸能力が調和をとりながら発展していくことや、そうした能力の発展を通じて人間どうしの交わりが公正性をともなって広がっていくことなどについて議論をする際に、しばしばこのパイディアという言葉を用いた（プラトン『国家（上・下）』藤沢令夫訳、岩波書店、1979年）。人間にとっての人格の形成と社会の構成との関係のあり方を反省的にとらえ直そうとする問題意識が、パイディアという言葉によって表されていたのである。そして、古代ギリシャ以来、人々は、しばしば無欠性や永続性を理想とする人間観や社会観をベースにして、この問題に対する解答を探し出そうとしてきた。そのことは、円環的教養（enkyklios paideia）などといった当時の言い方によく表されているし、近代の啓蒙思想家たちが百科事典（encyclopédie）の編纂事業に取り組んだのも、そうした伝統から流れを汲んでのことであった。」

<古典的教養の限界>

「しかしながら、階級闘争史的な観点から見ると、古代ギリシャにおける教養をめぐる議論は、それがあくまでも、奴隷制の存続を前提として初めて成立可能であるような有閑階級内部の問題意識の表現でしかなかったという点で、限界を含んでいた。政治と生産の分裂、あるいは、精神的活動と肉体的労働の分裂を前提としたうえで、もっぱら前者の営為の全面的な展開をめざすことに、どういった意味での調和なり公正性なりが認められてきたのだろうか。特権的な人々による教養の独占を打破して人類全体の例外なき調和を追求する立場から、そのことを問い、教養の内実を定義しなおすことが、市民革命期以降、特に19世紀以降の労働運動の昂揚とともに、新たに提起された課題であった。」

Received : August, 22, 2016

Accepted : November, 9, 2016